

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32657

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01763

研究課題名(和文) 他者行為の見積もりから語の意味を推測する力の発達：社会語用論的アプローチの拡張

研究課題名(英文) Development of word learning based on estimation of others' intended actions: An extension of social pragmatic approach

研究代表者

小林 春美 (Kobayashi, Harumi)

東京電機大学・理工学部・特定教授

研究者番号：60333530

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、他者の行為は合理的か、逸脱があるかに子どもが気づく能力が他者の意図推測に結びつき語の学習を促進する可能性を明らかにすることを目的としていた。1つ目の研究では、実験者が事物の部分に指を接触しつつ指先を小さく旋回させて語(部分名称)を言ったときに、成人がわざわざ行っているこの行為について幼児が部分名称の獲得に結びつけるかを調べた。2つ目の研究では、事物の部分に指先を接触させる指さし(接触指さし)を利用し、指さしに加え実験者の視線シフトからも他者行為の見積もりができるかを検討した。これらの研究から、他者行為の見積もりから語を学ぶ能力が幼児にあり、発達に伴う変化があることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで語の学習は連合学習、たとえば事物と語がどのように共起して出現するかを学ぶことが強調されがちであった。これに対し、本研究では他者の影響に注目する点で社会語用論的アプローチをとるが、これまで見過ごされがちであった「他者行為の見積もり」と語意味の推測能力について調べた点がユニークと言える。他者の行為は合理的か、逸脱があるかに子どもが気づく能力が他者の意図推測に結びつき語の学習を促進することを明らかにした。社会語用論的アプローチを子どものコミュニケーションに関わる推論の観点から拡張した。言語獲得に難しさを持つ子どもへの支援も、こうした能力を育てる観点から考慮することに貢献できる成果と言える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify whether children's ability to notice if others' actions are rational or deviant is linked to inferring others' intentions and facilitating word learning. In the first study, we examined whether children associate the deliberate action of an experimenter touching and making small circular motions with their fingertip on parts of an object while naming it (using part names) with learning those part names. In the second study, we investigated whether children could use both the contact pointing gesture (touching parts of an object with the fingertip) and the experimenter's gaze shifts to estimate others' actions. From these studies, it was found that children have the ability to learn words from estimating others' actions, and that this ability changes with development.

研究分野：言語発達学

キーワード：他者の意図 意図推測 言語発達 語の意味の発達 指さし 視線 幼児

### 1. 研究開始当初の背景

これまで語意味の学習については、子どもは事物と音声を結びつけて名称を学ぶとする連合学習アプローチと、大人の視線や指さしから推測し名称を学ぶとする社会語用論的アプローチの2つが対立してきた。前者のアプローチは、外界からのさまざまな入力自体に構造が存在するので、それを同期性や統計的観点から分析することで、事物と音声の連合を発見し学んで行くとする考え方である。ここでは親などの他者の役割は、入力の一部を提供するというにとどまっている。これに対し後者のアプローチでは、親などの他者の役割は根本的に重要なものであると考える。外界からのさまざまな入力は、実は親などの他者により、特にどの入力人間にとって重要であり注目すべきなのかという手がかりとともに提示され、それをもとに子どもは適切に学んでいく可能性がある。

本研究は後者のアプローチに基づき、他者が示す視線・ジェスチャー・言語といった手がかりが、他者の意図の推測を促す可能性に注目する。しかしこれまでは子どもがどのように他者行為の見積もりを行うか、という観点は見過ごされてきたと言える。他者の意図は他者の行為を観察し、通常の動きか、それとも通常とは何らかの点で異なる動きかを判断し、通常とは異なるとき、なぜ異なるのか、なにか特別な意図を伝えようとしているのではないかと気づくことが語彙獲得に結びつく可能性がある。この能力が語意味の推測能力に結びつくかを検討するため、2つの実験研究により調べることにした。

### 2. 研究の目的

他者の行為は合理的か、逸脱があるかに子どもが気づく能力が他者の意図推測に結びつき語の学習を促進する可能性を明らかとすることを目的とした。成人はたとえばコーヒーマーカーのボタンの位置がわからない人に対し、ボタンに軽く接触して教えたり、強調するために指先を小さく回転させたりすることがある。また親が子どものために絵本を読むとき、絵に触れて指し示したり、やはり強調するために絵を囲むように指を回転させたりして教えることがある。このときに親の視線は幼児の顔から指示対象物へと動くことから、この視線シフトもまた意図を明確に伝えている可能性がある。

本基盤研究では、2つの研究により、「他者行為の見積もり」と語意味の推測能力を調べる問題に取り組んだ。子どもにとって事物の全体名称(たとえばカップ)は比較的学びやすいが、部分名称(たとえば取っ手)は学びにくいことがわかっている。そのため、部分名称を学ぶタスクに着目して実験を構成した。

1つ目の研究では、指さしを行うときの指の動きや対象事物との関係に、通常の指さしとは異なる特徴があることに気づき、そこに特別な指示意図を見出し語彙獲得に結びつくか調べた。部分に接触しながら指先を回転させて指さしを行うことを、通常の指さしとは異なり特に部分などを特定する情報を精緻に伝えるということで「精緻指さし」(英語ではmarked pointing)と呼ぶことにした。

2つ目の研究では、自分を見続けている成人の視線にシフトが生じたことに子どもが気づいたときに、そのシフトと部分に接触しながら指さしをしているという特定の指さしによる指示意図を統合し、部分名称獲得に結びつけるかを調べた。幼児はこうした特別な指さしの動きや視線シフトに気づき、特別な意味を理解し言語獲得に繋げると予測した。

### 3. 研究の方法

1つ目の研究(部分特定の指さしの理解)は、実験者が事物の部分に指を接触しつつ指先を小さく回転させて語(部分名称)を言ったときに、成人の実験者がわざわざ行っているこの行為について幼児が正しく見積もりを行い、部分名称の獲得に結びつけるかを調べた。

参加者は2歳半児、4歳半児、成人とし、実験刺激は事物全体、その部分のいずれも、子どもにとって新奇であり、これまで部分名称を学ぶ際に重要と指摘されてきた相互排他性(Markman, 1989; Hansen & Markman, 2009)を使えない状況であった。Kobayashi et al. (2023)が使用した指さしは指さしのタイプで2水準(事物の部分に接触して指さしをするか、7 cm離れた位置から指さしするか)、人さし指の動きで2水準(人さし指を小さく回転させるか回転させないか)の計4種類であった。事物はKobayashi (1998)が部分名称獲得を2歳児と4歳児で調べた時の事物を利用した。事物はたとえばU字型ボルトにナットが嵌ったものであり、ボルトが事物全体、ナットが事物の部分と想定した(ボルト、ナットのいずれも知らない事物であることは他の調査で確かめておいた)。子どもにとって新奇な部分名称(ナット)を実験者が言いながら部分に接触して指さしをすると、少し離れた位置から指さしをするよりも、部分が指示されていることがわかりやすくなると予想した。また、部分に対して指さしをするとき、人さし指の先を小さく(直径1 cm)回転させながら行くと、より部分が指示されていることがわかりやすくなると予想した。

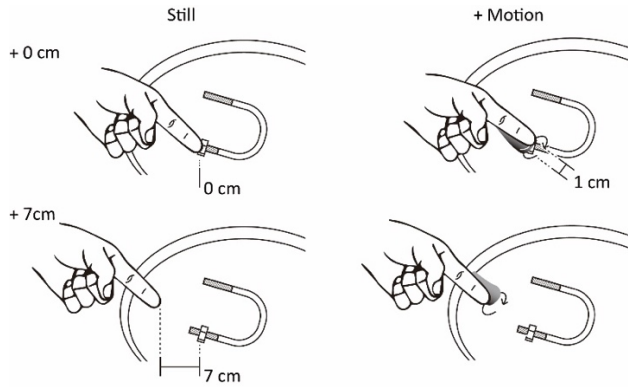


図1 部分に向けられた4種類の異なる指さし 実験では、人指し指の先端からの距離(0cm, 7cm)と、対象とする部分上で小さく旋回する動きのあり/なし が操作された。

2つ目の研究(視線シフトによる学習)は、事物の部分に指先を接触させる指さし(接触指さし)を利用し、指さしに加え実験者の視線シフトからも他者行為の見積もりができるかを検討した。3歳児・5歳児を対象とし、部分と全体が入れ子となった、より複雑な状態の事物の部分名称を学べるかを調べた。

実験では、実験者はまず2歳半児、4歳半児、成人の顔を見てアイコンタクトを行った後、ナットが嵌ったボルトを見せ、gaze shifting あり条件ではナットへ視線を移して「これはナットです」と言いながらナットの部分に対し指さしを行った(成人では新奇語を使用)。もう一つの gaze shifting なし条件では、子どもの顔を見たまま、同様に部分名称の提示と指さしを行った。後に「ナットはどれかな」と尋ねた(図2)。また子どもの視線の対象物について、映像から検討した。g

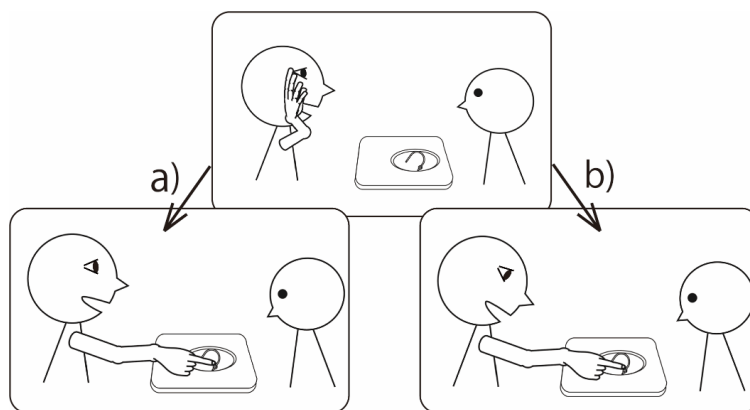


図2 実験者の視線シフトと部分への接触した指さし

#### 4. 研究成果

##### 1つ目の研究(部分特定の指さしの理解)

2歳半、4歳半、成人を対象として調べ、いずれの年齢群でもこの通常の指さしとは異なる指さしについて正しく解釈し、部分名称を学べることがわかった。結果は明確であり、接触指さしをして教えただけでは2歳半児は部分名称を学ぶことはできなかったが、部分上での旋回が加わった指さしにより提示されると学ぶことができた。4歳半児は接触指さしのほうが7 cm離れた指さしよりも、旋回がある指さしのほうが、旋回が無い指さしよりも、部分名称を多く学ぶことができ、接触かつ旋回がある指さしではよく学ぶことができた。成人では接触指さしだけでも部分名称を学ぶことができ、旋回が加わるとほぼ100%学ぶことができた(図3)。特筆されるのは、2歳半という若い年齢でも「他者行為の見積もり」から部分名称という比較的学びにくい語を学べる事が明らかとなったことである。このようにある特徴を持った指さしについて子ども・成人とも敏感であり、部分名称を学ぶ際に利用できることが明らかとなった。この成果は言語発達に関する評価の高い国際ジャーナルである Journal of Child Language に掲載された(2023年)。

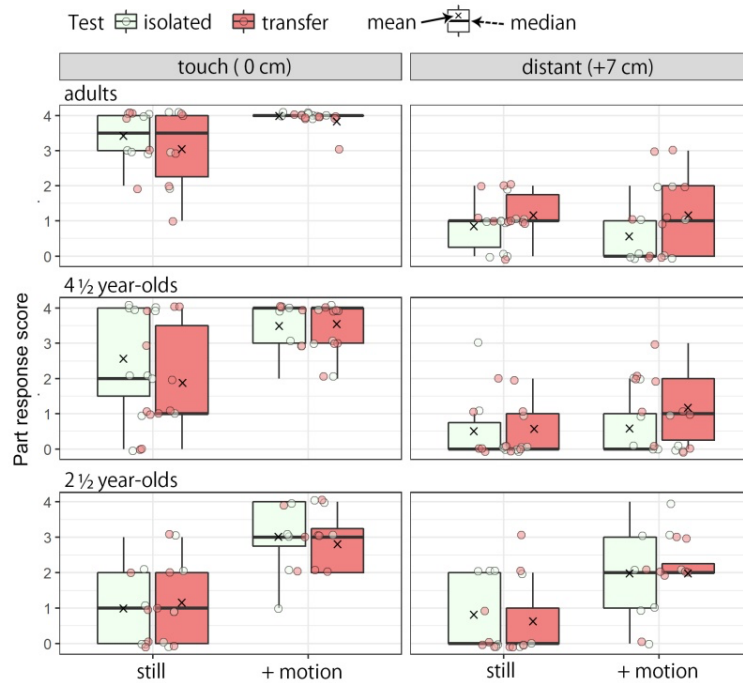


図3 各年齢群の参加者に対し、接触または7cm離れた指さしとその指さしが事物の部分上で小さく動いていたかを操作して部分を提示したときの、正しく部分に参加者が結びつけた回数。

2つ目の研究（視線シフトによる学習）

Gaze shifting を行った場合は、4歳半児と成人はナットの部分を正しく「ナット」と解釈していた。しかし、gaze shifting がなかった場合は、成人を含めいずれの年齢群も、事物全体（ボルト）をナットだと解釈していた（図4）。視線データを分析すると、実験者が子どもの顔を見続けていた場合でも、2歳半児も含めて子どもは実験者の顔のみならず事物もたしかに見ており、gaze shifting があると4歳半児と成人では事物への注視が増加していたことがわかった（図5）。同じ指さしを見ても、その指さしの対象物に対し実験者が gaze shifting を行ったのを見た場合は、指さしの解釈がより精緻になり、部分（ナット）が指示されたと解釈したと考えられる。これまで成人（実験者）の視線と子どもの視線の相互作用や語彙学習との関係は、視線追従（gaze following）の有無により主として議論されてきたが、gaze shifting によって指さしの解釈が変化し、意図共有に寄与することを初めて明らかにしたと言える。本研究は実験心理学において著名な国際的学術誌である Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition で2022年に発表した。

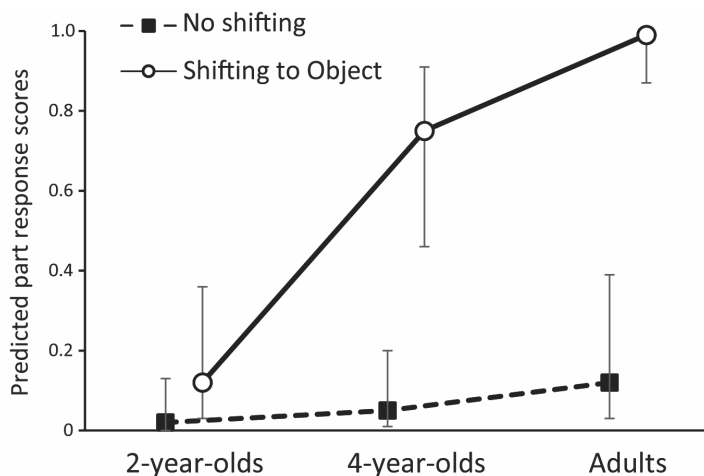


図4 各年齢群の参加者が、実験者が視線シフトをして部分名称を教えたときと、それをしないで教えたときの、正しく部分として学んだ回数。

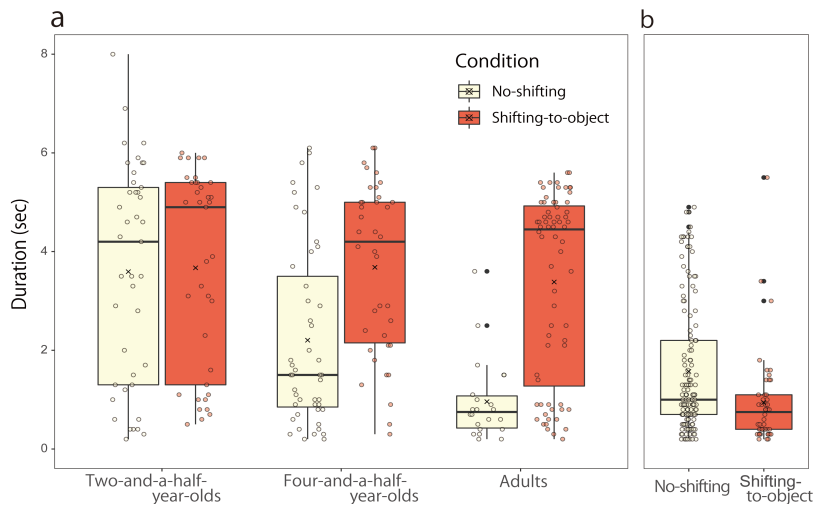


図5 各年齢群の参加者が、視線シフトが提示されなかったときとされたときに、対象事物の部分を見ていた時間(秒)。

#### 結果のまとめ

本研究は、子どもが他者の行為から他者が特別な意図を示そうとしていることに敏感であること、この能力が事物の部分名称という、事物の全体名称よりも難しいとされる語彙の獲得を推進していることを明らかにした。本研究は他者行為の見積もりから語を学ぶ能力が幼児にあることを示し、語彙発達における社会語用論的アプローチの有効性を示した。

#### 主要研究業績

\*Kobayashi, H., Yasuda, T., and Liszkowski, U. (2023). Marked Pointing Facilitates Learning Part Names: A test of lexical constraint versus social pragmatic accounts of word learning. *Journal of Child Language*, 50(2), 296-310.

\*Yasuda, T., and Kobayashi, H. (2022). Ostensive gaze shifting changes referential intention in word meanings: an examination of children's learning of part names. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 48(2), 272-283.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計27件（うち査読付論文 27件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 Kobayashi, H., Yasuda, T., and Liszkowski, U.	4. 巻 50(2)
2. 論文標題 Marked pointing facilitates learning part names: A test of lexical constraint versus social pragmatic accounts of word learning	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Child Language	6. 最初と最後の頁 296-310
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S0305000921000891	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する
1. 著者名 Yasuda, T. and Kobayashi, H.	4. 巻 48(2)
2. 論文標題 Ostensive gaze shifting changes referential intention in word meanings: an examination of children's learning of part names	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition,	6. 最初と最後の頁 272-283
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1037/xlm0000859	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Hagiwara, D., Kobayashi, H., and Yasuda, T.	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 Supplement Function of Pointing Gesture in Accompanied Speech	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Studies in Language Sciences	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34609/sls.22.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Kobayashi, H., Kobori, O., Ihara, Y., Yaguchi, H., and Yasuda, T.	4. 巻 13(1)
2. 論文標題 Understanding ostensive behavior in making inferences of referential intentions	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Letters on Evolutionary Behavioral Science	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5178/lebs.2022.90	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



1. 著者名 Nitta, H., Hashiya, K.	4. 巻 62
2. 論文標題 Self-face perception in 12-month-old infants: A study using the morphing technique	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Infant Behavior and Development	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.infbeh.2020.101479	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Handa, Y., Yasuda, T., Kobayashi, H.	4. 巻 43
2. 論文標題 The use of co-speech gestures in conveying Japanese phrases with verbs	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society	6. 最初と最後の頁 1555 ~ 1559
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yasuda, T., Ikeda, M., Itoh, K., Masuda, S., Kobayashi, H.	4. 巻 -
2. 論文標題 Using Grice's maxim of quantity to guide scalar inference without the scalar term "some"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Conference handbook of the 22nd Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences	6. 最初と最後の頁 1 ~ 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kobori, O., Yasuda, T., Kobayashi, H.	4. 巻 -
2. 論文標題 The relevance of the effortful actions in making inferences of the speakers' intended meaning	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Conference handbook of the 22nd Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences	6. 最初と最後の頁 1 ~ 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hagiwara, D., Yasuda, T., Kobayashi, H.	4. 巻 -
2. 論文標題 Can pointing gestures 'Fulfill' null arguments?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Conference handbook of the 22nd Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences	6. 最初と最後の頁 1~4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若松綾人、安田哲也、小林春美	4. 巻 -
2. 論文標題 聞き手の様子がオンライン環境下での教示行為に及ぼす影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本認知科学会第38回大会論文集	6. 最初と最後の頁 883~888
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林勝也、安田哲也、小林春美	4. 巻 -
2. 論文標題 共有知識がないときにジェスチャーを用いて伝えるか?: 遠隔対話におけるナビゲーション時の指示方略	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本認知科学会第38回大会論文集	6. 最初と最後の頁 888~893
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuda, T., Kobayashi, H.	4. 巻 48
2. 論文標題 Ostensive gaze shifting changes referential intention in word meanings: An examination of children's learning of part names	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition	6. 最初と最後の頁 272~283
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1037/xlm0000859	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Kasahara, J., Yasuda, T., Kobayashi, H.	4. 巻 19
2. 論文標題 Influence of ostensive signals on pragmatic reasoning: A preliminary study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studies in Language Sciences	6. 最初と最後の頁 19 ~ 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34609/sls.19.2_19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤恵子、安田哲也、小林春美、高田栄子	4. 巻 31
2. 論文標題 発話意図推測からみた自閉スペクトラム症児の語用論的能力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 80 ~ 90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11201/jjdp.31.80	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 今井むつみ、松井智子、中石ゆうこ、安田哲也、小林春美、木村淳子、内田伸子、楠見孝	4. 巻 59
2. 論文標題 ことばが育む思考力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 326 ~ 337
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/arepj.59.326	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Watanabe Kazuki, Yasuda Tetsuya, Kobayashi Harumi	4. 巻 -
2. 論文標題 The influence of context and total quantity information on inferences about quantifiers.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 8th International Conference on Kansei Engineering and Emotion Research 2020	6. 最初と最後の頁 1 ~ 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nitta Hiroshi, Hashiya Kazuhide	4. 巻 62
2. 論文標題 Self-face perception in 12-month-old infants: A study using the morphing technique	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Infant Behavior and Development	6. 最初と最後の頁 101479
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.infbeh.2020.101479	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 笠原臣、安田哲也、小林春美	4. 巻 -
2. 論文標題 語用論的推論における指さしと視線方向の影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本認知科学会第37回大会論文集	6. 最初と最後の頁 813 ~ 816
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小堀旺河、小林春美、安田哲也	4. 巻 -
2. 論文標題 語推測課題における可触性と事物配置の効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本認知科学会第38回大会論文集	6. 最初と最後の頁 736 ~ 739
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林春美	4. 巻 31(1)
2. 論文標題 意図明示的コミュニケーション: 子どもの語彙学習における効果と役割.	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 73-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11225/cs.2023.086	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hagiwara, D., Kobayashi, H., and Yasuda, T.	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 Supplement Function of Pointing Gesture in Accompanied Speech	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Studies in Language Sciences	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34609/sls.22.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤恵子, 安田哲也, 池田まさみ, 小林春美, 高田英子	4. 巻 34(2)
2. 論文標題 自閉スペクトラム症特性における語用論的情報の活用: 心情推測課題を用いた検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11201/jjdp.34.45	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kimura, H., Yasuda, T., and *Kobayashi, H.	4. 巻 45
2. 論文標題 Spontaneous co-speech gestures with prompt phrases reflect linguistic structures.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society,	6. 最初と最後の頁 1140-1145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kimura, H., Yasuda, T., and *Kobayashi, H.	4. 巻 24
2. 論文標題 The role of spontaneous co-speech gesture and its syntactic aspects?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Conference Handbook of the 24th Annual International Conference on Japanese Society for Language Sciences	6. 最初と最後の頁 94-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Otsuka, S., Yasuda, T., and *Kobayashi, H.	4. 巻 23
2. 論文標題 Do people correctly interpret linguistic structures when observing spontaneous co-speech gestures?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Conference Handbook of the 23rd Annual International Conference on Japanese Society for Language Sciences	6. 最初と最後の頁 4 pages
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木利輝, 安田哲也, *小林春美	4. 巻 40
2. 論文標題 教示行動における視線シフトは子どもの理解と教示行動産出を促すか?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本認知科学会第40回大会論文集,	6. 最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五味渡海, 安田哲也, *小林春美	4. 巻 40
2. 論文標題 指示手段の動きによる対象特定効果 - 人の指さしと矢印の比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本認知科学会第39回大会論文集	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 安田哲也
2. 発表標題 言っていないことは“意図された”ことと想定するべきなのか?
3. 学会等名 日本認知科学会第38回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kobayashi Harumi
2. 発表標題 Gesture and pause can facilitate chunking syntactic information in ambiguous phrases
3. 学会等名 The 42nd Annual Meeting of the Cognitive Science Society (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yasuda Tetsuya, Kobayashi Harumi
2. 発表標題 Understanding scalar implicature without scale markers SOME and ALL in Japanese preschoolers and adults
3. 学会等名 The 42nd Annual Meeting of the Cognitive Science Society (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安田哲也
2. 発表標題 幼児における「数量詞を用いない」数量的理解の発達
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林春美, 安田哲也, 伊藤恵子, 池田まさみ, 高田栄子
2. 発表標題 一次・二次の信念課題を含む心の理論課題の開発
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Handa, H., Yasuda, T., Kita, S., and Kobayashi. H.
2. 発表標題 Do gestures reflect linguistic structures ?
3. 学会等名 Joint Conference on Language Evolution ( 国際学会 )
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 池田まさみ, 安田哲也, 伊藤恵子, 小林春美, 高田栄子
2. 発表標題 ASD者の表情認知: 視線移動の動画を用いた検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kobayashi, H., Yasuda, T., Ishizuka, Y., and Yamamoto, J.
2. 発表標題 Young children 's active use of pedagogical cues when they teach object part names to others
3. 学会等名 Budapest CEU Conference on Cognitive Development ( 国際学会 )
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伊藤恵子, 池田まさみ, 安田哲也, 高田栄子
2. 発表標題 自閉症スペクトラム指数からみた話者の心情推測時の手がかり
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 岡ノ谷一夫・藤田耕司編 小林春美他著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 326
3. 書名 言語進化の未来を共創する	

1. 著者名 橋彌和秀	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 思考の自然誌 (訳: Tomasello, M. (2014). A Natural History of Human Thinking. Harvard University Press.)	

1. 著者名 小田亮・大坪庸介編 小林春美他著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 183
3. 書名 広がる！進化心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋彌 和秀  (Hashiya Kazuhide)  (20324593)	九州大学・人間環境学研究院・教授    (17102)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	安田 哲也  (Yasuda Tetsuya)  (90727413)	東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員    (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	University of Hamburg			
英国	University of Warwick			